

宣告

作者：クラウン

概要：1000文字小説

宣告

生きるというのは、こんなにも苦痛に満ちている。
わたしは時の限られた虜囚だった。
「成人することはないでしょう」
ありきたりな言葉。それが医師の宣告。
長くてあと、四年。

ひとりきりの病室は、数冊の本と窓の外の色褪せた緑だけ。枯れていく花を眺めていたのは何年前だったか。

看護婦は笑顔でわたしに話しかける。たまに顔を見せる母も同じだ。
まるで、哀れむような。
死に行くわたしを壊れ物のように扱う人たち。
「病は気からって言うでしょう？」
それなら、なぜわたしは外に出ることもできないの？
歩くだけの力がないからだと気付いたのは半年前。寝台から落ちて一時間、ささくれて冷たい板の間の上に横たわっていた。
わたしは、死に向かう細い一本道、何も無い場所で現実を突きつけられながら、後ろで点された炎に追いつかれるのを待っているだけなのだ。目の前で道は途切れている。
彼に会うまではそうだった。

「風邪をひくよ」
こんな言葉を掛けられたのは初めてだった。誰もマイナスの言葉を言わない。
車椅子の向きを変えてサンルームに戻ろうとしたわたしは、初めて彼を見た。まるで色褪せた世界に不似合いな白い天使。蒼白いわたしとは違う、透き通る白さ。
「死人みたいだ」
あまりにも涼やかで整った顔立ちに見惚れて、なにを言われているのか解らなかった。意味を理解したわたしは彼を睨めつけて部屋を出た。引き止めるようにキィと車輪が軋んだ。
その日はなかなか寝付かれなかった。自分の中に衝動が湧き上がってくるのを感じた。わたしは負けず嫌いだった。
たった一言で、わたしの世界は壊れた歯車を新しい歯車と入れ替えたように、ゆっくりと大きく廻り始めた。

彼は姿を現す度にわたしを変える。途切れていた道を広い世界に繋ぐように。
「一人前も食べられないの？」
「まだひとりで歩けないのかい」
たった一言で、わたしの前に道を作る。
自分で歩き、生きていることに実感を持ち始めると見える景色が変わった。
生きるというのは、こんなにも世界が輝いて見える。
なんて素敵なのだろう。
母が涙を滲ませて笑んでいるのを初めて見た。

「あなたのおかげで生きる希望が持てたわ」
彼は微笑んだ。
「良かった。やっと君に死の宣告ができる」
「え？」
「死を受け入れた、くすんだ魂なんて美しくないだろう？」
彼の背丈よりも大きな鎌が、鈍い光の弧を描く。

生きるというのは、こんなにも……。